

520 乳癌の骨転移と骨シンチグラフィ

中島哲夫、角 文明、竹内美穂、三塩宏二、上原
晃、渡辺義也、砂倉瑞良（埼玉がんセンター 放）
東 靖宏、末益公人、野本親男（同 胸外）

骨シンチグラフィは、乳癌の骨転移早期発見に重要な検査であり、また術後経過も長いいため、検査数は増加の一途をたどっている。今回は骨転移の high risk を示す因子を知るべく、経過観察中に骨転移が出現した 24 症例について検討を加えた。

病期は 1 期 2 例、2 期 12 例、3 期 10 例で術後 11 ヶ月から 6 年 6 ヶ月まで（平均約 3 年）に、明らかな骨転移陽性像を示した。骨転移陽性までの検査回数は 2-7 回（平均 4.1 回）であった。組織型では硬癌が 12 例と最も多く、髄様腺管癌 6 例、乳頭腺管癌 5 例であった。n 因子は n 0 3 例、n 1 12 例、n 2 4 例、n 3 3 例であり、リンパ管浸潤（1+）以上が 23 例、血管浸潤（1+）以上が 22 例であった。全例に術後化学療法が施行されていた。

521 乳癌症例における骨シンチグラフィ（初期条件と骨転移との関係）

田中茂子、小池宣之（多根病院 放）
小泉義子、田中正博、岡村光英、谷口脩二、
福田照男、越智宏暢、小野山靖人、下西祥裕、
大村昌弘、池田穂積、浜田国雄（大阪市大 放）

今回、我々は約 200 例の乳癌患者における種々の初期条件と骨転移の出現との関係について検討した。その結果、腫瘍径が 2 cm 以上であること、妊娠歴のないこと、術後化学療法がされていないこと、組織型が scirrhus type であることが骨転移出現の危険因子と考えられた。また治療切除症例では、手術と骨転移出現との間隔は約半数例で 50 カ月前後に集中しており、70 カ月後に初めて骨転移を認めた例もあり、特に手術時 40 才以上の症例では、長期間経過後、骨転移をみるものが多く、長期の follow が必要と考えられた。老人性の骨変化を中心とした false positive と、骨転移との鑑別は、診断上しばしば問題となるところであるが、ALP 等の血液化学データ、免疫学的データについて検討を加えた。その結果、血液化学データでは両者の鑑別は不可能であったが、免疫学的データが両者の鑑別の一助になりうるかもしれないとの印象を得たので、それについても報告したい。